

## “いい女デニム”へ、はじめの一步。

「いつもスーツ姿を見ていて、ちょっといいオトコだと思っていたのに、週末に会ったら幻滅しちゃった」とは、私たちアラフォー世代のガールズトークではしばしば登場する話題。平日をスーツで過ごしているため、週末のカジュアルウエアといえば途端に、渋谷など自分が最も輝いていた時代にタイムスリップしてしまう“永遠の青春”派か、はたまた今にも「ファー！」と叫び出しそうな“街ゴルファー”派、また買ったのは最近でも、そのすべてが格安ファストで見ると“気にしてません”派——世の男性にとって時代をうまく取り入れたカジュアルスタイルはなかなかハードルが高いようです。

ですがこれ、私たち女性にとっても笑えない話。たとえばこの春夏のビッグトレンドであるデニムをどう着こなすか——これは気をつけないと前出の“永遠の青春”派になりかねないので注意が必要です。何しろ今年のスキニーデニムやデギンス（デニム+レギンス）は20年ほど前に我々が狂喜したスリムジーンズに酷似しています。もう若くはない身体に、ピタッとフィットしたデギンス+ビッグサイズのトップスを自称2010年風にコーディネートしたところで、他人から見ると「麻布十番商店街のおばちゃんみたい」なんてエアポケットに陥っているかもしれないのですから。

デニムは素材であるがゆえに、ドレスのように1枚着て終わりとはいかず、ほかのアイテムとのコーディネートが要となります。またそれ自体が持つナチュラルで若々しい印象が、より難易度を上げているよう。デニムが似合うオトナの女性といえば、今も昔もジェーン・バーキンがまず思い浮かびますが、彼女の無造作に見えるヘアやコットンシャツ（そして数十年変わらない体形）にどれほどのこだわりとストイックな美意識が隠されているか、それはおしゃれにうるさいバザー読者ならおわかりのことと思います。

今号は世界各国のセレブリティやジャーナリストをお手本に、オトナならではのデニムの着こなしを考えてみました（P.50）。スキニーでもボーイフレンドでも、はたまたコンビネゾンでも、彼女たちの着こなしから見えてくるのは「自分のあるがままを見つめる」ことの重要性。おなかが多少出ていたって、お尻が垂れてきたって、あるがままの自分（もちろんある程度のダイエットなど抗加齢の努力は必須ですが）を冷静に受け止めて、自分のスタイルに適したデニムを見つけさえすれば、「麻布十番～（以下省略）」にはなりません。

この「自分直視力」はデニムに限った話ではなく、カバーに登場してくれたサラ・ジェシカ・パーカーほか、リリー・アレン（P.128）、レディー・ガガ（P.136）など、モードの第一線で活躍するセレブがその名声を長く保つための秘訣ともいえそう。私もまずは鏡を直視することから始めてみましょうか。春めいてきて暖かなある夜、全裸で鏡の前に立つ私……想像するだけでうすら寒さを覚えますが、いつまでも旬のデニムを着こなせるよう、勇気ある一步を踏み出そうとしています。

ハーバース・バザー日本版編集長 秋山 都



花々が咲き誇るドルチェ&ガッパナのルックをまとったMIYAKO-Chanは、春のフェミニンスタイルを完全マスター。次なる狙いは、自分らしさを生かしたオトナのデニムに決まり!